

テ三四四年モ釜所ノ塵汚スル場ニ置テ、殊ニ煤ゼサセ、官家大禮アルニ臨テ乗出タリ、果シテ役向ノ人見咎メシニ、先祖小松宰相重○長乗用ノ者ヲソノマ、用テ、カク古ビタリト咎テ事濟シト、夫ヨリ引續テ例用シ、當丹羽氏モ此度轍ナリシトゾ、又藤堂侯ハ、勢州阿侍從ノ事ユエ、家臣等、此度ハ轍乘勿論ト議セシニ、老臣曰、太祖高虎公、轍ヲ用ヒラレシコトナシ、然レバ子孫ノ今ニ到テ創用スペキニ非ズトテ、駕籠ニテ登城アリシト、丹羽氏ノ祖小松宰相ハ、イカサマ轍ニモ乗ツラン、左ナクトテ子產放魚ノ類、歎クニ道ヲ以テセバ、官家ノ咎モ無キ理ナリ、又藤堂ノ謙遜ハ論ズルマデモナシ、弘前侯ニ於テハ、祖先ニ由縁スペキナク、又遜順ノ義ヲ知ラズ、招其尤悔者宜哉夫、

〔類聚名物考船車三籠輿 らうごし〕

案○山間に、牢輿にや、牢獄に比ひたる輿を云に似たり、尤籠居の意にていふべけれども、意穩當ならず、

〔太平記三主上御没落笠置事〕

山城國ノ住人深須入道、松井藏人二人ハ、此邊ノ案内者ナリケレバ、山々峯々無残所搜シケル間、  
皇居醒后隱ナク被尋出サセ給フ。中○此時此彼ニテ、被生捕給ケル人々ニハ、先一品中務卿親王、  
中略○尊良都合六十一人、其所從眷屬共ニ至ルマデハ、計ルニ不遑、或ハ籠輿ニ被召、或傳馬ニ被乗テ、  
白晝ニ京都ヘ入給ケレバ、其方様歎ト覺タル、男女街ニ立並テ、人目ヲモ不憚泣悲ム、淺増カリシ  
分野也。中○三日〇元弘元迄、平等院ニ御逗留有テゾ、六波羅ヘハ入セ給ケル、日來ノ行幸ニ事替テ、鳳輦ハ數萬ノ武士ニ被打圍、月卿雲客ハ怪ダナル籠輿傳馬ニ被扶乗テ、七條ヲ東ヘ河原ヲ上  
リニ、六波羅ヘト急ガセ給ヘバ、見ル人涙ヲ流シ、聞人心ヲ傷シム、

〔輿車圖考三籠輿〕

籠輿てふもの、傳馬とならべとなへたれば、旅人の病者などのために、驛場などにて、もとは設